

第1部 『中南米音楽』の時代(4)

おはなし：中西環江 (聞き手：高場 将美)

『中南米音楽』は、1952(昭和27)年5月に、中南米音楽研究会の機関誌として創刊されました。これを、会員のサークルを超えた雑誌にしたのが中西義郎(なかにし・よしお)さんです。雑誌『中南米音楽』は、中西さんの熱意と努力で、1960年代前半には、月刊誌になりました。現在の『ラティーナ』誌は、この直接の延長線上にあります。

やがて雑誌発行と平行して、中南米アーティストの日本公演の仕事もはじめました。1965年に、オスバルド・プグリエーセ楽団の全国公演を実現。さらに、1970年のホセ・バツソ楽団で、「民音タンゴ・シリーズ」をスタートさせました。メキシコのロス・トレス・ディアマンテスの初来日にも協力、フォルクローレの巨匠アタウワルパ・ユパンキの後期の公演も実現しました。

また1960年代からアルゼンチンのLPレコードの輸入。本格化できたのは後年ですがアルゼンチン以外からもCDや民俗楽器・出版物などの輸入販売をしてきました。

中西義郎さんは1992年にブエノスアイレスで仕事を終えて日本に帰る空で、この世を去られました。

中西環江(なかにし・たまえ)さんは、その奥さんで、すべての実務に、ときには義郎さん以上にたずさわってきた方です。(高場・記)



●中央が中西環江さん。
向かって右に、
グローリアとエドゥワルド
(この夫妻は、この6月に、ダンス・イベントのため日本に来ます)

第2部 タンゴ／ワルツ／サンバ

うた：峰 万里恵 ギター：高場 将美

1. ラ・クリオジータ・サンティアゲーニャ (サンティアゴ娘)

La criollita santiagueña <zamba>

詞：アタウワルパ・ユパンキ Atahualpa Yupanqui

曲：アンドレース・チャサレータ Andrés Chazarreta

アルゼンチン北西部のサンティアゴ州は、少数のスペイン人と多数の先住民(インカ帝国からやってきた)とが400年ほど前に移住してきて開発し、独自の文化をもったところ。この曲は、フォルクローレ研究家でギタリストで(本職は公務員だった)、後には民俗芸能団を率いて大きな普及活動をした巨匠チャサレータが作曲あるいは採譜編曲したものです。1916年に楽譜出版されました。《サンバ》は、スカーフを振りながら男女カップルで踊る、求愛のダンスです。歌詞は、大地の音楽を創作した、南アメリカ最大の巨匠(作詞・作曲家・ギタリスト・歌手・文筆家)ユパンキが付けました。

サンティアゴの土地っ子娘、褐色の肌のきれいな娘。おまえのおかげで空気はいっぱいになる、サンティアゴの恋歌のしらべで。

わたしの土地のいなか娘、黒いまつげ。サンティアゴの朝に咲く、おまえは森林の花。

おまえが貯水池から水を運んでくる
とき、昼寝の時間が、おまえの歌声で

甘くなる。

サンティアゴの土地娘、編んだ黒髪。おまえゆえに男たちはうたう、サンティアゴの恋歌ビダリータを。

ほかの人たちは、街のしゃれた女性をほめそやすだろう。でも、野のかわいいむすめ、わたしは おまえの午後
にうたいたい、この おまえの目のように
素敵なサンバを。

2. アニョランサス (さまさまの追想)

Añoranzas <vals criollo>

詞/曲：ホセ・マリーア・アギラル José María Aguilar

《バルス・クリオージョ》とは、南アメリカの土地はえぬきのワルツという意味です。ウィーナ・ワルツはラテンアメリカ全域でも大流行し、たとえば19世紀末のメキシコでは、まったくウィーンのスタイルでたくさんの感傷的な曲がつくられました。また、南アメリカ 各国・各地で、その土地ならではの色彩・感情といったものが濃く入ったワルツがつくれ、これがバルス・クリオージョです。この曲は、カルロス・ガルデールの伴奏

者だったギタリスト、アギラルの作品。歌詞は奥さんにまず書かせ、それをより良く直した、と本人は言っていたようですが……。

凍った北風が、わたしのバラの茂みの花たちを殺した。わが青春時代から残ったものは、ひとりぼっちで見捨てられたバルコニーの手すり。

中庭には昔と同じ泉、わたしのうたを聴くことができた泉。でもそのそばで、痛ましい声で、冷酷な冬がうたいに来る。

白い雪が埋葬してゆく、すべての美しいものを、すべての愛を。ひとびとの魂の中でうたっているのは、悲しい

ミュージズ、痛みのミュージズ。

きのう愛にあふれる巣を織り出したつばめたちは、相談しあってもう行ってしまった、もっと熱い、別の気候の土地に向かって。

でも冬は、その悲しみとともに、すぐに支配を終えるだろう。ふたたび、あの美しいものたちが帰ってくるだろう。そして全世界が、しあわせに笑うだろう。

3. いつの夜か *Será una noche* <tango>

詞：マヌエル・フェラダース・カンポス Manuel Ferradás Campos

曲：ホセ・ティネッリ José Tinelli

作曲者は1930年代初めから活動した、ピアニスト出身のタンゴ楽団リーダー。歌手で女優のチョラ・ボッシュと結婚していました（彼の楽団も、チョラも、レコード録音は非常に少ないです。ラジオ放送やナイトクラブなどのステージでは、なかなかの人気者だったようですが）。『めぐり逢い *Por la vuelta*』など、洗練された和声感覚で今日も愛される曲をつくりました。作詞者は、芸能・スポーツ担当の記者を経て、ふたつの有名芸能誌の編集長になった人です。映画の脚本などの仕事もしました。マガルディがうたった『雪 *Nieve*』（シベリアに雪が降る……）など、いわゆるタンゴっぽくない歌詞を書きました。

わたしは知っている、きっと、いつか幸せな夜がやってくるだろうと。それが、わたしの勝利の夜になるだろう、生きることの疲れが、あなたを帰ってこさせるとき。

だからわたしは待っている。だからわたしは夢見ている。わたしは知っている、遠くであなたが、わたしの思い

出を祝福していることを。そしていつか、あなたは苦しみに耐えられなくなる。ノスタルジーが、あなたをわたしのところへ帰ってこさせる。

あなたが戻ってくる夜、わたしの魂は星の光を身にまとうだろう。そしてわたしの心はひとつの花になるだろう、愛の夜露の下で。

4. 嘘をつかないで *No mientas* <tango>

詞：エクトル・マルコー Héctor Marcó

曲：エクトル・バレーラ Héctor Varela

この曲ができたころ（1930年代末近く）、作曲者は、女性歌手の伴奏をしたり、そのころ大きな話題を呼んだフアン・ダリエソのスタイルを真似た楽団をひきいていました。ほどなく、ダリエソ楽団の第1バンドネオン・編曲者として迎えられ、大活躍したことは、ファンの皆様よくごぞんじです。作詞者は歌手でしたが、声が出なくなったので、作詞によってタンゴ界にとどまりました。後に、ピアニスト・指揮者のカルロス・ディサルリに認められ、彼の作曲で、かなり有名な曲をつくっています。

あなたのことばは わたしの希望の歌だった。そしてあなたの温かい両手の中で わたしの心は眠りこんだ。あんなに幸せだった、そしてあんなに盲目だったわたしの信頼。わたしの理性は、一度として疑わなかった。

でもきょう わたしは感じる——あなたの涙がわたしを焼き殺していることを、そして その不純な泣き声がわたしを納得させようとしている。それは あなたのあざ笑う声なのだ。それがわたしに宣告する、いつまでもあなたの愛に偽られて生きてゆく刑罰を。

わたしは知っている、あなたは死にそうなたたしの人生を憐れんでいることを。そして 率直なそぶりで あなたの内面をわたしに見せる。わたしは見つけるだろう、灰になったわたしの愛の残り火を。でも どうなってもいい、そうなるべきなのなら。

わたしはただ 魂をむき出しにした

あなたを見たい。誠実に すべてに正面から向かっているあなたを。そうすることで わたしが 哀れな死んだ花たちといっしょに立ち去ってゆくとき、わたしは少なくとも あなたの口から 真実をもっていけるように。

嘘をつかないで！ あなたの罪深い口は はっきりと変わって見える、誓いながら その嘘で泣きすがるとき。

嘘をつかないで！ あなたの両目でわたしは読んでしまった、あなたの愛をわたしがすでに失ってしまったことを、こいねがっても無駄なことを。

わたしに話して！ 真実をあなたに言ってもらいたい。そんな風にしてひとつの心を陰謀で殺すものではない。

嘘をつかないで！ あなたを見つめると わたしは自分を苦くする。そしてあなたを許したいと望んで 自分を裏切ってしまうことになるだろう。

5. あっちのほうのサンバ *Zambita de allá* <zamba>

詞/曲：フーリオ・アルヘンティーノ・ヘレーズ Julio Argentino Jerez

作者はサンティアゴ州バンダ県出身。最初はみずからのギター伴奏でタンゴをうたっていたそうです。首都ブエノスアイレスに出てきて、故郷のフォルクローレの魅力を、紹

介しました。亡くなるまでブエノスアイレスに住み、市民から深く愛される存在でした。

サンティアゴ人の歌といえば それはビダーラ。そしてチャカレーラとサンバを なんと上手に踊ること！

ボンボにとびついたら もう手を離さない。木杵と革で自分を伴奏する。そのへんで適当に叫び声——ウイハハ——イ！

だれかサンティアゴ人が死んだら泣く人はひとりもない。ビダーラをひとつうたってやれば 彼は天国へ行ってしまう。

ひとつとは鐘を打ち鳴らさない。ウイニャップも花を咲かせない。ただ村

のボンボだけが 彼を泣いているようだ——トントントンと。

サンバとガトとチャカレーラ、踊るために若い娘たち。アローハ酒の壺がたくさん——わたしは保証するけれど——決して足りなくなることはない。そしてサンティアゴの心がひとつ——わたしは保証するけれど——決して足りないことはない。

*アローハ=アルガローボまたはトウモロコシの実をつぶし、水と混ぜて発酵させた酒。

*ウイニャップ=雨や気象の変化の前だけに黄色い花を咲かせる木。材木・薬用にも使われる。

6. コリエンテス通りの悲しみ

Tristezas de la calle Corrientes <tango>

詞：オメーロ・エスポーシト Homero Expósito

曲：ドミンゴ・フェデリコ Domingo Federico

1940年代のはじめ、ほとんど革命的に新鮮なタンゴ創作で話題になった作者コンビの、『心のコンパースに乗って *Al compás del corazón*』に次ぐ2作目です。作詞者オメーロの父親はブエノスアイレス州サーラテ市で喫茶店をやっていて、そこにはこの地域で最高の音楽教授エーレルの指導する少年タンゴ楽団も出演しました。ここには、フランチェニやポンティエールなど未来の巨匠たちが集まっていて、首都ブエノスアイレスの楽団経営者ミゲル・カローが、この楽団をそっくり買い取りました。カローは、地方出身の優秀な音楽家を集める方針で大成功しました。この歌詞に作曲したドミンゴは、サンタフェ州ロサーリオ市出身で、カロー楽団の第1バンドネオン奏者です。

➡ オメーロ・エスポーシト

♣ ドミンゴ・フェデリコ



通りは まるで パンを買うためのコインの谷間のような……。逃げ道のない1本の川。その中で この街がぐるしんでいる！……

おまえの光たちには なんと悲しい青白さがあることか！ おまえの看板たちは十字架を夢見ている！ おまえのポスターたちは 厚紙のあざけりわらう声！

笑い声——それは アルコールに安心させてもらうことを必要としている！ 泣き声は 歌になる、わたしたちに愛をひとつ売するために！

悲しい喜びの市場！ 愛撫を売る古道具屋——そこに人々は夢を吊るす。

こころざしの低いボヘミアン生活に甘やかされた放浪者たち。貧乏人たち——もっている銅貨は 勝利することへのあこがれだけ。彼らは待つことの道をやわらかくする、ミルク入りコー

ヒーでいっぱい血で、どこかのバーのテーブルで！

人間たちはおまえを売った、キリストのように……。そしてオベリスコのナイフが、おまえに 止まらず 血を流させる……

悲しい……そうだと！ わたしたちの通りであるゆえに！

悲しい……そうだと！ おまえは夢を見ているから！

おまえの喜びは悲しみ。そして待っていることの痛みが おまえを刺しつらぬく！ そして青白い光とともに おまえは おまえの悲しみを泣きながら生きている！

悲しい……そうだと！ わたしたちの通りであるゆえに！

悲しい……そうだと！ おまえの背負う十字架ゆえに。

7. 瓦屋根の大きな家 Caserón de tejas <vals criollo>

詞/曲：カトゥロ・カスティージョ Cátulo Castillo

曲：セバスティアーン・ピアーナ Sebastián Piana

カトゥロは、短いモチーフと歌詞の最初だけ思いつき、「名曲だ！」と確信して、彼のピアノと音楽の先生だったセバスティアーンのところに持ちこみました。セバスティアーンは、カトゥロのモチーフを発展させて（そんなに発展もしませんが）第1部をつくり、第2部は転調して別に創作しました。こうしてできた全曲に、カトゥロが作詞して完成しました。ブエノスアイレスの、日本で言えば古いお屋敷町に当たる地区が舞台です。

ベルグラノー区……瓦屋根の古い大きな家……覚えていますか、お姉さん、歩道の上での数々のあたたかい午後のこと？……そのとき近くを通る汽車が、わたしたちのところにおいていった、古い追憶の数々——あのバラの木の、

しとやかな姿の下に……。

ベルグラノー区……瓦屋根の古い大きな家……アルヒーベ（水くみ場）はどこに行った？ あなたのの中庭たちはどこに？ 格子窓はどこに行った？

あなたはピアノに帰ってくるでしょう、わたしの年とったお姉さん。そして数々のメロディの中に、あの日々が生きてゆくでしょう、わが家の晴れた日々が。

甘い昼寝の時間におじいさんが話してくれた、あのお話にあったように、暗いホールの小さなピアノがもどってくるだろう、あのワルツの純粋なやさしさを、血として流そうと……

ワルツがふたたび命をもった！ ピアノの眠り込んでいた声たちの中で、そして あなたの手のこまやかな魔術にひきよせられて、おじいさんのフロックコートが舞ってくるだろう。

彼を呼んで……！ わたしたちは遠いお話を生きましょう。だって あのベルグラノーの古い大きな家で——閉ざされた神秘を打ち破って——ママが私たちを呼んでいる……！

8. わたしの村のサンバ *Zamba de mi pago* <zamba>

詞/曲：アバロス兄弟 *Hermanos Ábalos*

アバロス兄弟（ピアニストのアドルフォ・アバロスが音楽監督で、作詞作曲はほとんど彼ひとりとのことです）は、故郷サンティアゴゴ州のフォルクローレの演奏と歌、ダンスを紹介するレストランを、1940年代なかばから首都ブエノスアイレスで開いて大成功しました。タンゴのクラブやダンスホールが大盛況の時代でしたが、首都でもフォルクローレは（タンゴには負けますが）たいへん多くのファンを獲得していました。

くるしげに泣く ヴァイオリンひとつ、はるか遠くまで響くボンゴ、そして老いたアルパ弾きが わたしに故郷のノスタルジーをはこんでくる。

わたしには見えている——踊りのステップを踏んでいる きれいな田舎娘たち。そして彼女たちが通り過ぎるとき まなざしに 秘密のメッセージ。

わたしの 歌い手のさすらいのなかに、夜明け方のセレナータが、わたし

の魂のなかで わたしの故郷の村をふたたび生きさせる。

チャニャールの黄色い花、アルバローボの森、みどりのサボテン。そして夜には ひとつの歌声を わたしは懐かしく思い出すだろう。

わたしはさすらい 歩いていくだろう、どんなところへでも行くだろう。でもわたしの村のことは ただ死んだときだけ忘れるだろう。



チャニャール

アルガローボ
(木陰が貴重！
豆はケーキや酒に使う)



9. ラ・ポメーニャ (ラ・ポーマの歌い女) *La pomeña* <zamba>

詞：マヌエール・J・カスティージャ *Manuel J. Castilla*

曲：クチ・レギサモン *Gustavo "Cuchi" Leguizamón*

アルゼンチン北西部サルタ州の詩人（民俗伝承・音楽の愛好家・研究者でもあった）と、本業は弁護士だったピアニスト・作曲家の合作です。ふたりで、カーニバルの時期に、標高3500mのアンデス高原ラ・ポーマ集落をおとずれたとき出会った、素朴な力強い山歌をうたう女性に、インスピレーションを受けて作詞作曲しました。

エウローヒア・タピアは、ラ・ポーマで、空気に彼女のやさしさを与える。彼女が砂の上を通るとき、月を踏んでゆくとき。

彼女が刈ってゆく小麦は、彼女の胸で熟す。アルファルファの花を見ながら、彼女の黒い両目は青くなる。

彼女の顔は粉だらけになる。彼女の影は砂まみれになる。うたいながら、歌の魔法をこわしながら、彼女の悩みたちは闘い合う。

白い馬に乗ってやってくる 彼女の両手の中でカーハ（小太鼓）がふるえる。夜の中に沈んでゆくとき、彼女は褐色の肌のダリアの花。

10. ダンサ・マリーグナ (毒のある舞踏)

Danza maligna <tango>

詞：クラウディオ・フロロ *Claudio Frollo*

曲：フェルナンド・ランドレ *Fernando Randle*

作詞者は、本職は判事で、趣味として作詞家になりました。作曲者はピアニストで、ナイトクラブで、タンゴ以外の音楽（フォックストロットとか）を主に弾いていたようです。

やくざっぽいリズムが足を引きずっていく。タンゴは身をちぢめ また伸びる……その痛ましい音楽は、まるで、迫りくる脅威を感じているようだ。

わたしたちは生きよう、ノスタルジックで毒のあるダンスの15分間。ふたつの心臓のときめきを聴こう。アフロディーテのヴィーナスの神霊のもとで。

やくざっぽいリズムが足を引きずっていく。タンゴは五体を支配する。わたしのこめかみに掛かる、あなたのカー

ルした毛が、わたしの臨終の終油の儀式になるだろう。

神々の快樂、倒錯の踊り。タンゴは儀式、そして宗教。この土地のオルケスタはその祭壇、司祭はバンドネオン。

わたしは捕らわれた自分を感じたい、わたしの痛みの牢獄に入ったように。黙ったままでいなさい、わたしの魂の半分よ、ふたりのあいだには秘密があるのだから。

今後ともどうぞよろしく……企画・選曲：峰万里恵 プログラム作成：高場将美